

# 「山口勝弘日記」(仮称)の調査研究について

五十殿 利治

本年5月に卒然として長逝された山口勝弘先生は、戦後美術を代表する実験工房に属して以来、常に現代美術の先端で活躍されたことは周知のことであるが、1977年に筑波大学芸術学系に着任され、芸術専門学群、芸術研究科、芸術学研究科の教壇に立ち、後進の指導に当たられた。

山口先生が本学を退官されたのは1992年3月のことであるが、筆者が先生が青春時代の日記を残されていることを知ったのは、その前後のことであった。退官記念として、総合造形コースに関わる先生方が尽力されて出版された『総合造形』創刊号(1992年3月刊)のために、先生のインタビューをお願いした際であった。このインタビューは前年1991年1月31日より開始されて、全4回分をまとめ公表することになった。当時、山口先生は芸術専門学群長という重職に就かれており、学群長室あるいは芸術学系棟2階の会議室で行われたが、現在東京国立近代美術館美術課長大谷省吾氏の助力を得る一方で、現在明和電機で活躍する土佐信道氏からも協力を得た。その結果、公表する文章はB5判の創刊号の三分の一の分量、40頁にもなった。

ただし、すべてがインタビュー内容の書き起こしではなく、適宜補われた注記もあった。なによりも見逃せないのは、山口先生の個人史と戦後美術史に関わる証言であったが、さらにその内容に重みを持たせるかのよう、編集段階で山口先生がコピーで日記の一部を提供された。その結果として、その翻刻が掲載されることになった。

日記の翻刻は全体では大きく二部に分かれており、いずれも中略をはさみながら、一部は1950年3月6日から9月8日まで、二部は1951年3月6日から11月18日までである。以下にその重要性を再確認するために、興味深い箇所を引用してみたい。内容はちょうど実験工房結成の前後、ひとり山口先生のみならず、周辺の実験工房関係者の活動状況をかいまみる貴重な証言となっており、インタビューアとしては望外のことであったことはいうまでもない。

「[1950年]三月卅日 木曜日 くもり小雨あり

朝から午過ぎまで図書館。亘君に会ふ。

帰り池田[龍雄]君のところへ寄って、世紀の様子を尋ね“きのこたち”といふ描きかけの30号を見せてもらふ。[略]

果して九月の世紀展覧会はうまくゆくのかどうか?はなはだもって危うげな冒険である。ただ“アプレゲール”と“傷つけられた世代”の看板だけが売物で、中容は虚ろ形式はどこそこの模倣では、少なくとも既成画壇からはよくて黙殺を喰らひ、良識ある大衆からは笑殺的となるのではなからうか?

夜なよな若い身そらを持ってあまし、耐毒ゲンチャと化

しつつある人々の行動が僕には気になつてゐる。

ことに現在の組織が、芸術上のメチエの発見に対する科学的研究のためではなく、形而上理論の独裁と単なる集団の力を頼むためのものであり、それがますます封建的色彩を帯びた生活的結合に変わりつつある状態を見ぬいた者は、かかる組織がその第一回展の後に崩壊してしまふのではないかという予想を確信にまで高めようとせざるを得ない。

現在持つべき芸術運動の(それが必要なら)目的とその実践方法に対し、不断の討論による反省を加へない限り、その運動は彼等が理論上敵視してゐる廿世紀初頭のフランスを中心とした各種の運動よりも更に古い殻を知らずしらずの中にかぶりはじめてゐることを忘れるであらう。」<sup>①</sup>

これは山口先生が池田龍雄氏らと参加していた世紀の会や同絵画部の活動に関する貴重な記述である。

「[1951年]三月六日 火曜日 くもりのち風雨

朝から国会図書館分室へゆき、刑法勉強。

夕方から、福島宅の会合に出る。音楽はコーブランドのビリー・ザ・キッド。とくに拳銃の打合ひからサンバに移るあたりすばらしい。如何にもコーブランドらしい粋が縦横に織込まれてゐる。楽器の使い方の上手さも忘れてはならない。集まったのは、北代、福島姉弟、鈴木、秋山、他バレエをやる二人と名前失念の一人。

ところが、あとが大変。ビリー・ザ・キッドを伴奏してすばらしい踊りをみんなでどたばた。覆面騒ぎ。とうとう泊まって、徹夜で討論会。曰く、相対性理論、曰く染色体、曰く河童論、曰く量子力学、曰く怪奇小説、etc etc、実は秋十月に益田隆の踊りの音楽を武満君、装置、衣装を北代・福島両氏と僕、そして早稲田の秋山氏が筋を書くという計画さらに上演が近づいてきた時期から上演まで——」<sup>②</sup>(なお[ ]内は引用者による注記)

これはこの秋のピカソ祭に向けて実験工房への跳躍台となった最初期の動きとして山口氏がインタビュー後に紹介された記述である。

この日記の翻刻について思い起こされるのは、先生の筆跡が明晰で、翻刻にまったく苦労がなかったことである。私も研究者として大正や昭和の書簡や文書を読む機会があるが、しばしば往生することがある。しかし、山口先生の日記についてはそのような記憶はまったくなかったのである。

これまでもしばしば言及する機会があったが、山口先生とのインタビューこそ私にとっては、大袈裟ではなく、日本の戦後美術史への入口となった。本誌に寄稿したCIE図書館に関する論文も<sup>③</sup>、先生が回想され、その

存在の意義を示唆されたからであり、その後ずっと宿題としていたからであった。

さて、そうした山口勝弘日記といわば再会することになったのは、大学を退職して、研究論文を執筆するよりも、貴重な記録を残すことに精力を費やしたいと思っていたところ、齋藤さだむ氏を通じて、日記の存在が確認されたからである。

齋藤氏とともに先生の部屋を尋ねたのは2017年6月8日のことであった。先生はすでに日記を手元に用意されていた。大小二つの青いデスクトレイに納められていたが、驚いたことはその冊数であり、またその時期であった。それは1945年から50年代半ばにわたる18冊で、変形も含むが、A5判とB5判のノートブックが主な判型であった。以下、これを全体として「山口勝弘日記」と仮称し、文中では単に「日記」とすることにす（表1）

なお、このほかに、几帳面に月日や曜日を明記するスタイルの日記というよりも、スケッチなども自在に描かれたノートと呼ぶ方が相応しいものが1960年代のものを含めて8冊ある。（表2）

敗戦後の占領期における山口先生個人のみならず、実験工房等を含む芸術家の活動をうかがえる貴重な記録であることは一目瞭然であった。これにまつわる話をうかがったが、当日は、この日記群の存在とその重要性を確認し、幸い先生の承諾を得たので、先生の芸術活動ならびに戦後美術史研究のためにお預かりをして辞することになった。

ふたつのデスクトレイの内容を確認すると日記以外の記録も納められていた（図1）。たとえば、筆者がインタビューの書き起こしについて、挿入図版について先生に指示を仰ぐという手紙、そしてまさに上で再度引用した日記のコピーなどである。

肝腎の日記であるが、全18冊であり、その概要は表1の通りである。敗戦直後から始まり、1955年まで、つまり実験工房の活動がたけなわの頃までである。

上述の引用からも容易に推測されるように、先生の日記の記述のスタイルは基本的に客観的な視点が貫かれ、簡明である。そのため、先生の美術活動、美術思想といった側面のみならず、周囲の事柄、たとえば上の引用でいえば、世紀の会、池田龍雄、あるいは実験工房のメンバー間の交友の実態などが自ずと浮かび上がってくる。

こうした山口勝弘日記の重要性に鑑みて、共同研究を念頭において、山口勝弘インタビューと同じく、北代省三宅での深更に及ぶインタビューにも同席した関係もあって、東京国立近代美術館美術課長大谷省吾氏、そして実験工房について展覧会を企画して美術館連絡協議会大賞を受賞した神奈川県立近代美術館学芸員で本学大学院修士課程の西澤晴美氏と、日記群についての予備的な検

討を行った。齋藤さだむ氏にも同席をお願いした。

その結果、日記の美術史的な意義を再認識した。岸田劉生の日記に匹敵するようなといえば大袈裟すぎるだろうか。またこれまでも自著でしばしば言及されている池田龍雄氏の日記と比べるような機会があれば、より立体的な戦後美術史の実相が浮かびあがるだろうというのが実感であった。

こうして四人で協議したところ、研究助成を受けて、すなわち日本学術振興会の科学研究費を獲得して、本格的に調査研究を進めようという段取りとなった。

10月になって申請にあたり、研究代表者は大谷氏をお願いすることになった。そしてその意図するところを以下のように概括した。

「本研究は、戦後日本とくに占領期を中心に前衛芸術運動について実証的に跡付けを行い、研究基盤の整備に寄与しようとするものである。戦後日本の前衛芸術は、近年国際的な注目を集めており、学術的検討が重ねられつつある。しかし敗戦直後はGHQの検閲もあり、刊行物が限られ、事実関係が確認しがたい。一方、高齢となった当事者の回想はしばしば正確さを欠く。本研究はこうした研究上の問題を克服するために、当時の関係者の文書を中心的な調査対象としつつ、同時に関連資料によって裏付けをとりながら、検証作業を進めるものである。具体的には、1951年に東京で結成された「実験工房」の中心人物のひとり山口勝弘（1928年生まれ）の日記類を精査するとともに、同時代作家の文書資料との比較考察しながら、これまで一面的にしか見えてこなかった戦後日本の前衛芸術の実像、そして価値観の大きく変動した戦後日本における、芸術と社会との関係をより多角的に浮かび上がらせたい。」

昨年（2018）4月に4年の研究計画が基盤研究（C）として採択された。実際には、研究はまだ緒に就いたばかりである。山口勝弘先生が鬼籍に入られた現在、日記に記された内容について直接うかがう機会が失われたことは残念であるが、山口勝弘日記の研究を深めることによって、先生のご厚意に報いることを目指したい。

## 付記

本研究については、山口裕康氏のご理解を賜り、また齋藤さだむ氏より多大なる協力を得ております。記して謝意を表します。

なお、本文は科学研究費基盤研究（C）「戦後日本の前衛美術のクロス・レファレンス的研究 1945-1955」（課題番号18K00201、研究代表者大谷省吾）による研究成果の一部です。

表1 山口勝弘日記リスト

番号	執筆時期	判型
1	1945年～1947年	A5変形
2	1947年4月19日～12月31日	A5変形
3	1948年1月～3月20日	A5変形
4	1948年3月21日～9月1日	A5
5	1948年9月2日～1949年5月4日	B5
6	1949年5月5日～8月15日	B5
7	1949年8月23日～1950年1月6日	B5
8	1950年1月7日～6月22日	A5
9	1950年6月23日～11月7日	A5
10	1950年11月7日～1951年5月22日	A5
11	1951年5月23日～10月18日	A5
12	1951年10月19日～1952年5月9日	A5
13	1952年5月10日～9月18日	A5
14	1952年9月19日～12月7日	A5
15	1952年12月9日～1953年6月10日	A5
16	1953年6月11日～1954年1月4日	A5変形
17	1954年1月5日～10月17日	A5変形
18	1954年10月20日～1955年9月1日	A5

図1 山口勝弘日記  
撮影：齋藤さだむ

表2 ノート類

番号	推定される執筆時期
1	1949年（北代宅での会合についての記述）
2	1949年？（米国美術雑誌1949年2月号掲載記事の翻訳、法学関係の記述）
3	1950年？（米国美術雑誌1949年12月号掲載記事の翻訳、法学関係の記述）
4	1961年（サトウ画廊での「現代のヴィジョン展」関連デザイン）
5	1961-62年（関連する月日、曜日の記載）
6	1963年（南画廊のティンゲリー展の記載）
7	1964年（内科画廊オノヨーコ展の記載）
8	年代不詳

## 註

- (1)「山口勝弘インタビュー——生い立ち、学生時代、ヴィトリース、実験工房、瀕死の芸術館」『総合造形』、創刊号、筑波大学芸術系総合造形研究室、1992年3月、57頁。
- (2) 同前、61頁。
- (3) 五十殿利治「CIE図書館と占領下の美術界」『藝叢』29号、2014年、1-17頁。

（おむか としはる）